

Title	今日の社会崩壊とキリスト教教育
Author(s)	大木, 英夫
Citation	キリスト教と諸学 : 論集, Volume23, 2008.3 : 219-230
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3248
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

今日の社会崩壊とキリスト教教育

大木 英夫

Ⅰ 戦後日本社会の構造変化——「契約化」

一、戦後社会の構造改革と新しい構造原理

① 憲法第二十四条「家族生活における個人の尊厳と両性の平等」「婚姻は、両性の合意のみに基づいて成立し、夫婦が同等の権利を有することを基本として、相互の協力により、維持されなければならない」。——この結婚生活の構造原理は「契約」。コントラクト関係、それは伝統的家父長制と対立する。社会の基本単位である家庭の構造改革は、社会の構造改革と連動する。日本の古い家族原理は、皇室典範第一条「皇位は、皇統に属する男系の男子が、これを継承する」に典型的に出ている。それを巡って皇室典範改訂の議論がなされた。皇室典範改訂の議論は、この度の継承者出産によって中断されたが、解決はされていない。十六世紀イングランドの王室継承では、「ヘンリー八世と六人の妃」の話が有名である。今日の日本は、イギリスの十六、七世紀の段階にあるようだ。

② 中根千枝『タテ社会の人間関係——単一社会の理論』。——タテ社会とは家父長制、それに対して憲法的規定の夫と妻の合意（契約）的結合をヨコ社会と呼ぶ。しかし、これは単純な図式化である。中根氏は単に結婚家庭だ

けでなく、当時のケネディ大統領の政治体制づくりを例として社会構造がコントラクト関係であることを指摘。日本の社会と比較して「筆者（中根氏）の分析によると、『コントラクト』精神は日本人にはまったく欠如しているものであり、ほとんど絶望に近いと思われる」と書いた。

③ ある批評家の中根氏に対する批判——「ヨコを支える精神的規範は契約思想である。中根千枝自身、ヨコの説明を十分していないのは横の原理を自分でも知らないからである」。この批判は当たっている。契約思想の研究として日本では初めてわたしの『ピューリタニズムの倫理思想』（博士論文は一九六〇年、日本語版は一九六六年）がある。『ピューリタン——近代化の精神構造』（中公新書一九六八年初版、現在、聖学院大学出版会から出版されている。）も同じ系統の議論である。

④ 契約原理は近代革命の理念——ロバート・フィルマーは十七世紀の国王絶対主義を父と子の関係（パトリアーカリズム、中根のいうタテ社会、家父長制）で説明した。ロックはそれに対して契約理念で政府を考えた。それはピューリタン革命の思想的継承。革命とはリヴォリユーション、転回である。自然的成長ではなく、精神的転回である。革命には古い社会の破壊の性格がある、しかしそれだけでない、デモクラティックな社会の形成の原理でもある。大家族↓小（核）家族という量的縮小ではない、質的転回である。契約的に形成された国家も基本的には同じ構造原理による。

二、今日の日本社会における家庭の崩壊

① 家庭崩壊の最近の悲惨な一例——家庭の崩壊は二家庭の問題ではない、社会全体の問題でもある。最近の悲劇は、奈良県田原本町の医師（四七歳）の長男（一六歳）の事件であるが、そこには日本の社会の問題の凝縮図があるように思える。この長男と面会した父は、この息子が「人生をほかして（捨てて）いる」という感じをもった

という。タテ構造が崩壊したが、ヨコ構造が確固たるものとして形成されたわけではない。

② 契約原理は戦後日本において形成的ではなく破壊的——この「破壊」の悲惨はこう言い換えることもできる。日本の問題は、既（過去）にないという「無」と未だ（未来）ないという「無」、つまり過去と未来との間にどこもおる「無」によって「存在」が脅かされている状態にあると。今年の日本を揺るがせたニュースの言葉で言えば、「耐震強度偽装」、それが戦後の家庭、社会、国家の建築の問題であった。戦後の日本社会は日本国憲法によって建設されねばならなかった。ところがその建設ができず、日本社会が崩壊の危機に瀕している。「存在」が確立されない、それは「無」によって脅かされている。「無からの創造」が起こればならない。そのような深刻な問題である。

③ エモリー大学のウィット教授 (Prof. John Witte) を迎えて去る六月に聖学院大学大学院で二日にわたる二つの講義と演習があった。そこで結婚問題が取り扱われた。第一日の講義は「From Sacrament to Contract」、第二日目には「From Contract to Covenant」と題されたものであった。アメリカはコントラクト結婚の本場である。しかし、最近その問題性が真剣に問い返され、「Contract」から「Covenant」への転向が要求される。「コヴェナント」とはすぐれて聖書的な概念である。アメリカでは一九九七年ルイジアナ州がはじめてコヴェナント結婚を制定、その後アリゾナ州とアーカンソー州が導入、コントラクトからコヴェナントへの動きがある。その講義の中でウィット教授は、マラキ書第二章一〇節以下の言葉を引用した。

「我々は皆、唯一の父を持っているではないか。我々を創造されたのは唯一の神ではないか。なぜ、兄弟が互いに裏切り 我々の先祖の契約を汚すのか」——この故に神は、「もはや、献げ物が見向きもされず、あなたたちの手から受け入れられないからだ」。そしてその理由としてこう述べられている。「あなたたちは、なぜかと問うている。それは主があなたとあなたの若いときの妻との証人となられたのに、あなたが妻を裏切ったから

だ。彼女こそ、あなたの伴侶、あなたと契約をした妻である。主は、霊と肉を持つ一つのものを造られたではないか。そのひとつのものが求めるのは、神の民の子孫ではないか。あなたたちは、自分の霊に気をつけるがよい。あなたの若いときの妻を裏切つてはならない。わたしは離婚を憎むと、イスラエルの神、主は言われる」。

（新共同訳）

二つの英語の言葉（コントラクトとコヴェナント）は、日本語では一つの言葉「契約」と訳される。たしかにこの二つの言葉は英語世界でも区別されないで用いられることがある。メイフラワー契約は「コンバクト」を用いるが、それはコヴェナントに近い。E.U.人権契約はコヴェナントを用いた。コントラクトは今日商取引的に用いられる。しかし、今日ではコントラクトはコヴェナントとの重なる関係を失い、コヴェナントの意味を全く知らない。もしコントラクトを「俗なる契約Ⅱ商約」というならば、コヴェナントは「聖なる契約Ⅱ聖約」と呼んで区別することとした。この違いが今日の問題状況を把握する。

④ キリスト教的結婚式が広まっている。ある芸能人が「一日駅長」になるように「一日牧師」もいるらしい。『男はつらいよ』の「寅さん」が僧侶よりもまい説教をする場面がある。この「偽装」が問題である。戦後の結婚のコントラクト化は、疑似キリスト教化と言つてもよい。しかし、キリスト教的結婚は本来「コヴェナント」でなければならぬ。コントラクトは平盤なヨコ関係だけが、コヴェナントはヨコ関係だけでなくタテ関係、つまり神関係をもつ。垂直次元をもつ。「神が合わせたもうたものを人は離してはならない」。コントラクト（商約）とコヴェナント（聖約）のこのような区別を知ることから、契約思想の学習が始まる。すべて「約束」は心の問題、善意志の問題である。コントラクトとコヴェナントとはその点で同義的な要素をもっている。ただ自分のために相手を騙してはならない、利用してはならない。「商約」（コントラクト）であつても、単に相互契約だけではなく、

その契約の保証（「担保」）が求められる。結婚は「聖約」でなければならない。「聖約」（コヴェナント）には証人がいる。「自分の霊に気をつけるがよい」。「浮気」はいけない。家庭は契約（聖約）の理論と實際を学ぶ学校となる。そこから契約社会を担うべき次の世代が出てくる。家庭崩壊はこの家庭形成の原理の学習がないことから生じて来る。夫と妻との結び付きは、垂直次元の神が設定された場所（家庭）において成立する。一十一は二ではなく、大いなる「一」になる（ピカート）。ピカートはカトリック信者であった。サクラメント的な「一体性」を言う。しかし本来創世記に「二人の者は一体となるべし」と記されている。

⑤ 「荒波の上に架ける橋」（Bridge Over Troubled Water）——この有名なサイモンとガーファンクルの歌は日本語では「明日に架ける橋」となっている。これは友への愛を歌っているが、「I will lay me down」にはキリストのイメージが重なる。「友愛」は「相互愛」であるが、そこにはキリスト教的「犠牲愛」によって吊り上げられていなければならない。結婚家庭は、人生や社会の荒波の上に架ける橋、吊り橋のようである。吊り橋は上からの支えなしには折れてしまう。結婚家庭が「下」（自然的なもの）から支えられていることを否定しない。しかし、「上」（超自然的なもの）から吊り上げられていなければならない。

近代的結婚は、深い「思想」（思慮）を要求する。よい結婚は、よい思想によって形成される。結婚家庭は、契約社会の基礎単位である。家庭崩壊は社会崩壊の始まりである。契約によってできるすべての人間共同体は、そこに垂直次元をもっていなければならない。そこですべて契約による関係の確かさの要求は、コントラクトからコヴェナントへ転向を促す。それは、契約が古い契約から新しい契約（イエス・キリスト）へと深められてはじめて、この世にあって耐震強度をもつ家庭ができる。上から支えられていない商取引的コントラクト結婚は、途中で折れる。戦後日本の内面世界は、だんだん荒波が高くなってきた。契約結婚の危うい橋が落ちて、子どもたちが荒波に落ち

て流されて行く。契約結婚は「死との契約」（イザヤ二八・一五）であろうか。「荒波の上に架ける橋」あるいは「明日へ架ける橋」とは十字架によって吊り上げられた「吊り橋」である。

Ⅱ 「教育再生会議」とキリスト教教育「ボーン・アゲイン」

一、後向きではなく前向きに

① いわゆる「構造改革」——なぜ最近「構造改革」という言葉が流行したか。広い意味での「近代化」「グローバルゼーション」の進行に旧来の体制が合わなくなる「ズレ」が生じたからである。「一九四〇年体制」（野口悠紀雄）という戦前からの「護送船団方式」が急速な社会変動によって合わなくなつたからである。護送船団方式は戦後の経済復興にはなお有効であつたとしても、これからの日本はやつて行けない。それが小泉内閣の構造改革となつて現れた。その構造改革はトータルかつラディカルに日本を揺るがしている。

② 日本青少年研究所（文部科学省・総務庁外郭団体）の一九九六年の調査——この調査は、今日の崩壊状況の結果の報告である。「親に反抗すること」が本人の自由と答えた日本では八四・七％、アメリカ一六・一％、「先生に反抗すること」が自由と答えたのは日本七九％、アメリカ一五・八％、「学校ずるやすみ」をしてもよいは日本六五・二％、アメリカ二一・五％。これらの数値は日本の内面の現れでもある。二〇〇二年の調査では「気力がない」、世界最大の債権国が「気力がない」。気力は財の基本、ところが「気力がない」のを「やさしさ」と肯定する。「高い社会的地位」を人生の目標とするのは日本二％、韓国七・五％、アメリカ四〇％、これは成熟社会とみるか、斜陽のはじまりと見るか。「フリーター」（日本語）、一九八二年に五〇万、一九九二年に一〇一万、二〇〇〇年に一九

三万、二〇〇三年に四七二万を突破。夢がなくなる。すべて内的崩壊の結果である。この崩壊の響きはわれわれを急がせる。

③ 安倍政権は教育再生会議を設立、教育問題を第一の政策課題とし、教育基本法改正を強行する姿勢を打ち出した。今日の教育行政は思想的に混乱している。一大矛盾がある。一方では、競争原理とか市場原理とかの導入によつて制度的な改革をする。バウチャー制を持ち込んで、商約的コントラクチュアリズムを教育界に持ち込もうという議論もある。その結果はすでに予示された。ライブドアのホリエモンとか村上ファンドにおける倫理的類廃である。他方では、「愛国心」を新しい教育原理として持ち込むことによつて教育を戦前型に戻そうとするからである。バスの運転台に後向きに座つて運転している。バニヤンの『天路歷程』の中に、「落胆の泥沼」にはまった二人の旅人の話が出てくる。一人は主人公の「クリスチャン」、もう一人は「盲従者」である。「盲従者」はここまでは一緒に来たが、落胆の泥沼に落ちてもがき、これまで来た道の方に向かって這いだし戻つて行く。しかし、クリスチャンはその泥沼の底にある踏み石（キリストを暗示）を踏んで前向きに這いだし前進する。

二、どこから直して行くか

① 先に挙げた奈良の事件の父は長男に面会し、父としての過ちを謝った、そして一緒に罪を償うことを誓った。問いは、なぜこんなことが起こる前に、父は態度を変えられなかったのか、ということ。父が変われば子どもも変わる。家庭が変われば、子どもも変わる。それでは、教師が変われば、生徒も変わる、学校が変われば、生徒も変わるのではないか。

② 思想の不適合——チャールス・コ克蘭は、なぜローマ帝国が滅亡したかという問いに対して洞察的解答を提示した。古典的（ギリシャ哲学）思想がローマ帝国時代の社会変化を把握できなくなったからだという見方であ

る。同じことが今日の日本に言える。新しい時代に相応しい担い手としての人間形成の問題である。それが教育の問題としてモロに出てきた。教育行政を導く者の思想が古くなって時代を把握できなくなっている。思想の不適合が政策を混乱させている。今日の社会崩壊は、過去に逆もどりして解決できない。この国会に出された教育基本法の改訂はどうか。思想的には、コントラクト化した社会の崩壊はコヴェナント的に、前向きに形成的に乗り越えて行くべきなのに、古い思想、たとえば戦前の『國體の本義』と本質的な変わらない古い思想に逆行することになる。

③ 教育機関と社会関係——たしかに、キリスト教教育機関は、神殿の至聖所ではない、教会ではない。その前庭である。キリストはその前庭を商取引の場にしたことを見ていわゆる「宮きよめ」を行なった。キリスト学校がコントラクト化してはいないか。今日の教育崩壊にキリスト学校が対応できているか。キリスト学校の再生は、社会の再生へ直結するということを知らねばならない。それは教育機関は社会関係をPTAにおいてもっているからである。PTA (Parent-Teacher Association) は戦後アメリカから入った制度であるが、「アソシエーション」とはヴォランティア・アソシエーションの一つ、ここにもコントラクト化の一例を見る。それをどう本来のコヴェナント共同体まで向上させるか。

④ 社会性の教育 "Only One for Others"——個の確立は社会の確立と結びつく。個の自覚は、社会性の訓練の中で育つ。堀田力氏は、アメリカ社会をみて感心した。それは垣根がない、そして隣人を内に迎える。日本にそれがない、日本は閉鎖的である、と感じた。新しい家庭間の交わり、そして子どもの養育の仕方を考えねばならない。個人の確立と共同体性とは結びついている。家庭間の交流の中で子どもたちの社会性を養う。それは対外関係にも広げられる。語学教育が必然的に多文化間交流を養う。日本は依然として島国根性が残って居て国際的社交性が欠けている。"Only One for Others"は、まさに教育による日本社会の構造改革である。どう実行するか。それが無い

と、家庭崩壊の諸問題を家庭内に「囲い込む」ことになる。

⑤ 約束教育——幼児期からコヴェナント社会形成の準備をすることが重要である。「契約」とは約束事である。約束を守ることなしに、社会は成り立たない。契約社会の形成は、高い倫理性を要求する。契約社会の崩壊は信頼の崩壊によつて起こる。それは今日の受験教育の問題と関連している。契約の原理は、倫理性の成熟なしには、破壊的に作用するばかりである。これまで契約の原理は破壊的にのみ作用したが、これからは形成的に作用させねばならない。その革命を平和裡に起こす、だから教育の一番となる。日本社会の誤ったコントロール・チュアリズムの被害者を救済せねばならない。キリスト教学校は、日本社会の病を癒すホスピタルとならねばならない。

III ひとつの事例として——「日本を変えるため聖学院が変わる」

一、聖学院教育憲章

以上のべたことの実践的一事例として、聖学院がなしてきたことを紹介したい。もし「聖学院」というところを「キリスト教学校」として読んでいただければ幸いである。

聖学院は新しいミレニアムを迎えるとともに「聖学院教育会議」という三年継続の全法人的会議を開いた。そして「聖学院教育憲章」を制定した。それは新しい思想、古くてなお新しい思想としての契約思想をもつためである。そこに「From Contract to Covenant」がなければならぬ。なぜ聖学院が聖約共同体として回復せねばならないか。それは自分が生き延びるためではない、それは日本社会が求める救いをキリスト教的教育によつてもたらすためである。

それは今日の状況を予想した動きであった。今年サッカーの二〇〇六年ワールドカップ・ドイツ大会があった。そのときジーコ前監督が日本チームを造った。「サッカーの哲学」を教えると言った。試合に勝つためのチームの形成である。サッカー自体が、動くフォーメーションである。シユートできるように動く。それが崩れるとゴールに行けない。改革は形成へ。教育会議は「Reformation」であった。しかし勝ちに行くためには「Formation」が必要である。教育も、こういう理念、こういう思想をもつかが問題となる。聖学院の哲学は聖なる契約の思想でなければならない。

キリスト教学校も私学として自発的意志的設立である。だから国内国外を問わず、競争を避けない。「教育のワールドカップ」に出る、そのような課題を自覚し、勝つためのFormationを考えねばならない。オシム監督は走るチームと言った。聖学院は、よきサマリヤ人のように走り寄る教育へのFormationが必要であろう。

二、現実（リアリティ）の喪失と回復

日本社会の基礎共同体である家庭が、契約理念を生かすほどの契約理念自体の理解を持たないまま、外面的に契約的になって今日まできた。外面的にはキリスト教的結婚式をする。しかし、キリスト教的結婚はまさに「聖約」である。神のもとでの神聖なる契約である。内容なき外形は空虚である。その空虚の中で思想なき家庭が営まれている。

聖学院教育は、神殿の至聖所の前庭で「聖」学院として立つことによって成立する。聖学院が聖約共同体となることは、この日本社会の空虚さの中にしかるべき「現実」を取り戻す課題と取り組むためである。

人間が人間になるという変化可能性が教育の可能性である。この「なる」ということは単なる身体的成長ではない。新しい人間になることである。その変化の実現が人間をして人間たらしめる。それは生き方の転回、人間の革

命、転回（コンヴァージョン）である。日本の現状はそれを果たさなかった結果ではないか。戦後日本は、憲法の規定するところの「現実」をもっていない。キリスト教学校は、その名に相応しい「現実」をもっているか。来る百年に聖学院はキリスト教教育の場としての「現実」を取り戻す。

三、聖学院の百周年は聖約共同体形成を課題とする

生まれながらの「クリスチャン」はいない。人間が「新しくなる」こと、それは大江健三郎のいう「新しい人間の方へ」という方向性に停滞するのではない。それは第二の本性と言われる「よい習慣」を造ること、その全体には古い習慣から新しい習慣への変化（革命、回心のような変化）による第二の本性の獲得形成である。キリスト教教育とは Education ではなく Edification である。建て上げることであり、立ち上がることである。

聖約共同体の成立は、現代日本の批判原理と形成原理の確立となる。聖学院は、新しい家庭、そして新しい社会のコントラクト化の頽落、つまり垂直次元を失った契約社会を、垂直次元をもったコヴェナント的契約社会の形成へと前向きに救い出す。それが教育会議以来目指してきたことである。聖学院は、日本の社会の崩壊の理由を知っている。聖学院が聖約共同体になることは、聖学院が日本の明日への橋となるためである。ブレア首相が「この国に必要なものは、第一に教育、第二に教育、第三に教育」と言ったが、わたしはそれをあえて「キリスト教教育」と言い換えようと思う。From Contract to Covenant、この動きがアメリカに起こり出した。日本にこの動きが起こらねばならない。戦後日本社会のコントラクト的水平次元の相互性は、キリストの十字架の犠牲愛の垂直次元によって支えられねばならない。戦後社会のコントラクト化は、「新しい契約（コヴェナント）」としての恩寵なしに、崩壊に瀕している。戦後日本のコントラクト化を墮落から救うために、キリスト教教育は自らを聖約共同体として形成することによって実力を養わねばならない。キリスト教学校は日本にあって「ただ天を仰いで立っている」ので

はない。日本を変えるために聖学院が変わる。聖学院は「聖」学院になる、「聖約」共同体となる。キリスト教学校は「新しい契約に仕える資格」（第二コリント三・六新共同訳）を獲得せねばならない。「練達が希望を生み出す」（ロマ五・四）からである。

——日本のプロテスタント・キリスト教は、横浜バンド、札幌バンド、熊本バンドとして出発したではないか。「バンド」とは「コヴェナント」である。聖約である。こうして聖学院は以下のような「聖約」をもって神の前に祈った。

聖学院百周年聖約

主の年二〇〇三年から二〇〇六年まで聖学院は創立から百周年を記念し、学校法人聖学院として心をひとつにし、創立の理想を回顧し、また来る百年を展望する機会をもってきた。日本の現状を顧みるとき、敗戦後外面的復興によつて隠蔽されてきた内面的問題が今や人間や家庭の崩壊となつて現象し、重い教育課題として迫っている。この課題と真つ向から取り組み日本の未来に希望をつくり出すことはとくにミッション・スクールの使命であると言わねばならない。学校法人聖学院は、聖学院が主と仰ぐ神の前に、この使命達成のため新しい百年に向かって教育のために召された聖約共同体として自己を形成し、法人全体一致協力して使命を担い、主の栄光をあらわすよう努めることを、ここに厳粛に聖約する。

二〇〇六年八月

学校法人聖学院 理事会会合宿一同
教育同盟代表者会議講演（2006/11/11、於聖学院大学チャペル）